

水草研究会第20回全国集会開催報告

「学会って一種のエコツアーだよな。ヨーロッパのある小さな村は、学会の誘致や調査研究のために来村する人がおとすお金だけでなりたっているんだよ。浜中町もそうなのといいな～」

という上司の一言から、今回の水草研究会の誘致話はじまりました。私は全国集会誘致のお願いをするために、雪の残る札幌で開かれた第45回日本生態学会に出向き、角野先生を探しました。平成9年3月のことです。発表の合間をぬって会場をブラブラしていると、運よく新潟大学の福原先生と談笑している角野先生を発見することが出来ました。ラッキーです。難無く角野先生を捕まえることができたのです。水草研究会をぜひ誘致したい。そう申し出ると二人は顔を見合わせ「いいね～、霧多布だとエクスカッションで見る場所にも事欠かないしね。」とのうれしい返事をいただきました。この年の夏に徳島で開かれる全国集会で、総会に計らないと正式な返事は出来ないとのことでしたが、一つの大きな仕事が動き出したという手ごたえを感じました。私たちは今回の水草研究会全国集会の開催を町おこしの一環として位置づけていました。成功すれば学術研究と地域振興が結

び付く第1歩となります。そう思うとよけい「良いものにしたい!」という思いがつよくなり、一人で空回りしてしまうこともしばしばありました。関係各位(特に角野先生)のみなさんには大変ご迷惑をおかけしました。

全国集会前日の8月7日の夜、角野先生と若干の打ち合わせをするために宿泊場所となっている浜中観光ホテルに向かいました。観光ホテルの玄関に入るやいなや目に飛び込んできたのは、なんだかあやしい人達の集団。皆さんニコニコしながらアチコチで談笑しています。その中から断片的に聞こえてくる単語が「同定」「標本」等とてもマニアックな言葉ばかり。みなさん、気をつけてください。同業者にはすぐバレてしまいます。

8月8日、全国集会当日の朝を向かえます。前日のうちに会場の準備は済んでいました。しかし、スペース、人員等の都合で受付窓口を1つしかつくれず、受付にずいぶんと時間がかかってしまいました。そのため、午前中に予定されていた記念シンポジウムの開会が若干遅れてしまいましたが、それ以外には特に目立った混乱もな



くスムーズに本番に突入できたと思います。

シンポジウムは下田さん、角野先生、原口さんにそれぞれ話題を提供していただき、それぞれご専門の立場から水草の多様性と保全について語っていただきました。それぞれの分野をリードしている方ばかりですので、大変興味深いお話を伺うことができました。難点をあげれば、総合討論での私の議論の進め方がまずかったことくらいでしょう。

当日一番心配していたのは昼食のことです。水草研究会がいくらくじんまりとした研究会とはいえ、集会への参加者は50人を越えていました。この数が会場周辺で昼食をとるとすると、近隣の食堂等はパニックに陥るにちがいありません。幸いにもお世話していただける食堂があり事なきを得ました。都市部での開催であれば、十分に周辺の飲食店で昼食をとっていただけるだけのキャパシティーはあるのですが、田舎での開催ではそうもいってられないのです。

午後からの総会、研究発表会はいわばメーンとなるパートです。浜中町からも石本豊助役が総会に出席し、挨拶をしました。少し歓迎の思いが強すぎ、若干あいさつが長くなりましたが、それは研究会誘致が初めてということでお許しください。

総会の後、研究発表会が始まりました。会員の皆さんの熱意あふれる研究発表が続きます。私も聴衆にまざり議論に加わりたところでしたが、集会幹事は色々雑用があるものです。参加費等の徴収具合の確認や帰りのバスの確認等、結構出入りが多く、落ち着いて発表を聞くことが出来ませんでした。途中、休憩を挟んだ段階で時間が少々押しているのが気にかかってきました。研究会終了予定時刻の午後5時からは町内の婦人団体による踊りの練習が会場の予約になっていました。大幅に時間を超過しなければよいのですが…、スムーズに時間内に終了してもらいたい。しかし、発表・議論は充分に行ってもらいたい。なかなか難しいところです。後半の座長をおこなう下田さんが私に「時間大丈夫？ 質問の時間とかを設けても大丈夫？」と聞いてきました。内心どうしようか迷っていたのですが、「大丈夫です。存分にやってください」と言ってしまいました。言ってしまってから内心ドキドキしましたが、会場側担当者の方に終了時間が遅れる旨を伝え、婦人団体の人達には別室を使っていただく様をお願いをしたところ、快く了承してくださいました。もう大丈夫です。下記の発表が全て無事終了し

ました。

1. 山本いずみ・国井秀伸（島根大学汽水域研究センター）：安定同位体を利用した異形葉の炭素の転流について
2. 津久井公昭・山崎正夫（東京都環境科学研究所）：酵素電気泳動法によるミクリ科植物の同定手法について
3. 春日井隆（名古屋港水族館）：名古屋港水族館におけるアマモの育成と展示
4. 浜端悦治（琵琶湖研究所）：小川原湖（青森県）における沈水植物の分布現況
5. 松井宏明・佐々木英代（株式会社環境調査技術研究所）：横浜市内河川柏尾川水系における水草の分布
6. 丸井英幹・梅原 徹（環境設計株式会社）：淀川の植生の変遷
7. 下田路子・宇山三穂（東和科学株式会社）・中本学（大阪ガス研究開発部）：深田の植物—敦賀市中池見の場合—
8. 桜井善雄（応用生態学研究所）：岩手県御所ダム湖の夏季沿岸帯植生とビोटープとしての特性
9. 高橋英樹（北海道大学農学部附属植物園）：千島列島の水草
10. 富沢日出夫（霧多布湿原センター）・甲斐美弥子（霧多布湿原センター友の会）：霧多布湿原におけるヤチボウズのサイズ構成

後片付けを全員でおこない、宿泊先である浜中観光ホテルへと向かいました。次ぎは懇親会です。浜中観光ホテルは別な機会でも何度か利用したことがあり、料理等の内容も想像がつかしました。安心してまかせられます。すこし楽な気分で「楽しもう！」と考え、懇親会に参加しました。みなさんいかがだったでしょうか？

翌日はエクスカッションです。あいにくの小雨模様の中、若干の不安を覚えながら浜中観光ホテルへ向かいました。全員フィールドワーカーだということもあり、このくらいの雨はへっちゃらということになり、予定通りに行くことになりました。

まずはジュンサイ沼周辺の散策です。ここは過去、原野商法で切り売りされた場所で、湿原の中、縦横に道の跡が伸びています。この道跡を利用して、点在する沼に接近していきます。ここではジュンサイ、オヒルムシロ、タヌキモ類等が観察できました。タヌキモを見ながら議

論するグループ、写真撮影に熱中する人、ただ風景を楽しむ人達、それぞれが、自分たちのペースで楽しんでいきます。さすが熟練のフィールドワーカー達です。ガイドする側としてはこんな楽なことはありません。何も言わなくても、案内するだけでOKなのです。付近にはミズゴケの発達した湿原もありました。ここは近くに道路が伸びているため、地下水流に大きな影響をうけているのでしょう。中央部が陥没し、ハナゴケが優占しているミズゴケハンモックが数多く観察されました。全体的に乾きつつある湿原といった印象をうけます。残念なのはこの辺での調査が進んでいないことです。そのため、具体的に乾燥化の現象が把握出来ていないので、有効な手立ても打てないでいます。ジュンサイ沼では運よくジュンサイ採りをしている人がいて、格好の被写体になっていたようです。

次ぎの視察はMGロードです。地下にパイプを通すという新しい工法でつくられた湿原の真ん中を貫く自動車道です。ここでは側溝に数多くのミツガシワ、クロバナロウゲ、タヌキモ類が見られます。天然記念物区域を間近に見ることができるので皆さん熱心に観察されていました。

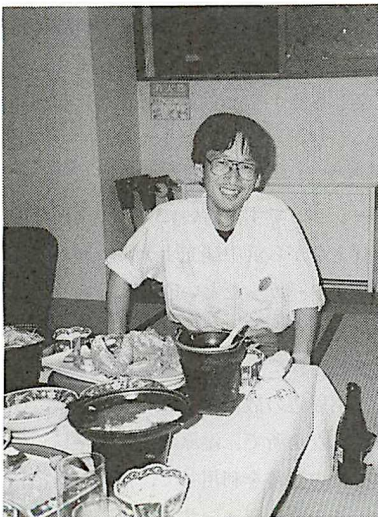
そのあとは霧多布湿原センターで昼食と見学です。お弁当を配って、館内の注意事項をお話して昼食です。ようやく一息いれられます。私は自分のお弁当をもって昼食の輪に加わります。昼食が済み、館内シアタールー

ムでVTRの上映をおこない、館内のショップでお買い物も沢山していただき、そのあと、ヤチボウズ木道の散策です。ヤチボウズは私の研究対象でもあり発表もこなった題材なので、結構皆さんの関心を集めていたようです。このときばかりは、ヤチボウズさんも得意満面だったことでしょう。

ヤチボウズ木道散策の後は琵琶瀬木道の散策です。ノハナショウブを期待していたのですが、若干時期が遅かったようです。それでも、皆さんにはご満足いただけたようで、盛んにカメラのシャッターを押す姿を見ることができました。

エクスカーシオンはここでとりあえずは解散です。参加者一行を乗せたバスは釧路駅に向かい、それぞれ帰路につくひとあれば、浜中町にしばらく滞在するひと、道内旅行に出掛けるひとさまざまでした。

初めて全国集会の幹事役を務めさせていただきましたが、本当に良い経験をしたと、感謝の気持ちで一杯です。当初の目的であった学術研究と地域振興の融合は第1歩としては大成功だったと感じています。浜中町には霧多布湿原をはじめとした素材は無尽蔵にあります。あとは研究者のみなさんを受け入れる力をつけることです。これをきっかけとして、大きな学会も開催できる位の力をつけていきたいと考えています。本当にありがとうございました。(富沢日出男)



大活躍した富沢さん



霧多布湿原におけるエクスカーシオン風景